

## 腰椎分離症の早期治療を前提とした伸展時腰痛症の治療

西岡第一病院 スポーツ整形外科  
中野和彦  
札幌医科大学 整形外科  
竹林庸雄, 堀 清成, 山下敏彦

**【目的】** 成長期のスポーツ選手における伸展時腰痛症に対して分離症の早期治療を前提とした診断と治療を行い、分離症の頻度と特徴および保存治療の成績について調査したので報告する。

**【対象と方法】** 2003年4月から2005年8月までに腰痛を主訴として当科を受診した症例で、ほぼ毎日スポーツ活動を行っている成長期(10~18歳)の患者を対象とした。このうち腰椎分離症の特徴とされる腰部伸展時痛を初診時に認めた89例(平均年齢14.6歳、男70、女19)に対して、単純X線とCT検査を行い、分離症の有無、発生高位、病期分類(Moritaら)を調査した。保存療法として、腰椎軟性装具の着用、スポーツ活動の中止、日常生活での腰椎伸展を制限するよう指導を行った。腰痛が消失した時点から軽い運動を許可し、腰痛の再発がなければ元のスポーツ活動への復帰を許可した。骨癒合・偽関節率について、病期分類別に比較検討した。

**【結果と考察】** 分離症は89例中45例(50.6%)に認められた。片側分離は18例(40%)で、両側分離は27例(60%)であった。分離発生高位ではL5発生が33例と最も多く、以下L4が12例、L3が3例、L2が2例であった。病期分類では、初期が14例(31.1%)、進行期が9例(20%)、終末期が22例(48.9%)であった。

初診時に分離症を認めた45例のうち、経過観察中にCTで骨癒合を確認できた症例の骨癒合率は40%であった。病期別に骨癒合を検討すると、初期の14例中12例(85.7%)、進行期の9例中6例(66.7%)で骨癒合が得られたが、終末期の22例は全例骨癒合が得られなかった。また、片側分離では66.8%で骨癒合を得られたが、両側分離では22.2%と骨癒合率は低かった。

保存治療による骨癒合率は初期と進行期に限定すると78.3%であった。したがって、早期に腰椎分離症を診断し、骨癒合可能な時期に保存治療を開始することが重要であると思われた。